

デュロック種系統造成豚を活用した肉質向上試験

(第2期中期運営計画重点推進事項 ①ブランド力強化を支える新品種・新技術の開発)
(平成26年度～30年度) 養豚研究所 育種研究室

1 背景と目的

国内の養豚生産は、豚価の低迷や輸入豚肉との競合、畜産環境問題等の生産環境の変化により自給率は50%台まで低下しています。

一方、国内では安全で安心できる、おいしい国産豚肉が求められ、有利販売を目的とした銘柄豚肉の生産等の産地間競争が激化しており、特色のある豚肉生産が強く望まれています。

このため、発育や筋肉内脂肪含量の向上を目的に造成されたデュロック種の系統豚（ローズD-1）を活用した高品質な豚肉生産について検討しました。

特色のある豚肉の生産

LW



LW・D

2 研究成果の概要

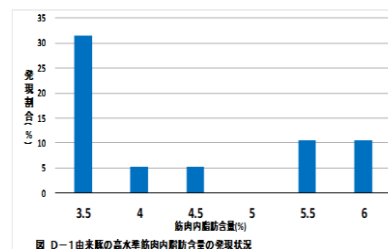
一般の肉豚として利用される三元交雑豚（LWD）の雄系として、系統造成途中世代豚（第3，4世代）及びローズD-1（第5世代）を利用して、生産された肉豚の発育や肉質への効果を調査しました。

- (1) 肉豚の発育は、造成途中世代豚を利用した場合を含めて良好な成績を示し、平均的な発育の肉豚では概ね5ヶ月齢前後で出荷体重に達しました。（表）
- (2) 筋肉内脂肪含量は、LWの1.7%に比較して、全体で3%増加しており、筋肉内脂肪含量の向上を主眼に造成された「ローズD-1」を利用することで、より高品質な豚肉生産が可能となりました。
なお、性別的には、雌に比べて去勢で高い傾向にありました。（表）

表 品種別・交配世代別の発育状況及び筋肉内脂肪含量

品種	交配世代	110kg到達日齢(日)			筋肉内脂肪含量(%)		
		♀	去勢	全体	♀	去勢	全体
LW		158.7	146.7	152.7	1.2	2.3	1.7
LW・D	G 3	153.9	142.1	148.0	2.9	3.2	3.0
	G 4	156.8	149.2	153.3	3.1	3.6	3.3
	D-1	157.3	152.6	155.0	2.6	3.1	2.9

- (3) D-1の交配により生産された三元交雑豚では、筋肉内脂肪含量が高水準である個体が発現する傾向が見られ、より特徴的な豚肉生産への活用が期待できました。（図）



3 実用化に向けた対応

ローズD-1の安定的な供給体制が整備され、県内の養豚農家で広く活用できる状況になっています。

また、筋肉内脂肪含量に着目した新たなブランド豚肉の生産への取組が進展しています。